慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	軍事的批判 豊太閤朝鮮役, 杉村勇次郎著
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.3 (1922. 5) ,p.121(471)- 123(473)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220500-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

あるとしてゐる。即ち國家の目的を人類の道德的完成に認め、人間の道德的本性は國家のうちに其の最高眞實の實現を見るとなせるプラトーの思想に依立するのである(三八七頁)。けれどもかかる目的は、現實の國家に果して求め得らるるものであらうか？プラトーの所謂國家は理想國家であつて、換言すれば神の王國にひとしい。それ故かかる國家が現實の日本に實現さるるものとは到底思考されず、もし實現されたとすれば、そはもはやわれらの日本ではないであらう。

以上の所論は主として最後の章、即ち『第二維新に面せる日本』、『世界戰と日本』、及び『世界史を經緯しつつある二問題』についてであるが、實にこの部分は著者の思想の最も鮮かに躍動せるところであり、從つてまた本書の最も著しき特色をなしてゐる。著者は自ら史學專攻の門外漢でありとなし、この一卷にあつめられた諸篇を學術的價値を有する研究の發表でないと斷つてゐるが、われらも本書の他の部分において、特にいちぢるしき見解に接しないうらみさへ感ずる。またその研究範圍の狹少なことも文明史としては甚だ不滿である。がここにわれらの全然同感するところは、德川幕府における政治家が、眞實の政治家たる資格として必ず哲學並びに史學を修めねばならぬと考へたるに、今の政治家が全くこれを顧みず、時としてこれを嘲笑の的となせることに對する滿腔の不滿と不服とを吐ける點である(二五一―二頁)。人類生活の眞の理解を得るためには、現實と理想とに徹しねばならぬ。而してそは史學、哲學の志すところである。

現實批判にとぼしきわが史壇に、火のごときアジア主義を高唱し一貫せる主張によつて日本文明を評論せる著者の意氣はまことに壯烈である。過去の日本文明をかへりみ、將來の使命を思ふものは著者の思想に贊すると否とを問はず、一度は本書を繙くべきであらう。(松本芳夫)

軍事的批判　豐太閤朝鮮役(杉村勇次郎著　日本學術會發行)

こは本年一月に歷史講座の一として公にせられたものである。著者は曾て軍職にあつたが、偶ま閑を得たために、京都大學に入り、日本戰史を研究せられて居るのである。

さて著者は本書の序文に於て「本書は强て專門的講究に便するを圖ることなく、寧ろ專門以外の讀者に對し、通俗的に軍事知識を普及せんことを目途とし」たものであると云つて居る。其の內容の紹介に先ち、其の目次を擧げれば、第一緖論、第二準備、第三統帥、第四編制、第五兵數兵器、第六給養、第七水軍、第八明軍、第九韓國に就いて、第十媾和、第十一結論の十一章で、なほ附錄として、豐太閤朝鮮役經過表が終に附してある。

著者は朝鮮役の失敗の諸因を指摘論評せられ、先づ何れの役をとはず、各軍の編成に於ては其の指揮官の明示を必要とするに、本役に於ては、これを明示せざるの點をあげ、殊に平時に在りて對等相下らざる大名をして、一は指揮權を有し、一は其の配下に立たざるを得ざらしむるには、こゝに明確なる指揮權の附與を

必要とする旨を論じて居る。

次に水軍の編成を缺きし點をあげ、最初舟奉行なるものを設けたるも、（文祿元年三月三日）こは單に軍隊輸送船の支配役に過ぎざるもので、其後輸送途中に於ける危險に想到し、始めて一の水軍を組織するに至りしもこれとても軍隊輸送の保護警戒に當りて、何等海戰の爲に設けられたるにはあらず、（文祿元年四月十九日）秀吉の文祿元年五月中に高麗の都に到着せむことを期しながら、六月二日に至り急に諸諜逡巡頗る意氣地なき朱印狀を發し、渡海延期を「當月來月は不時早風有之事之條、是非御渡海御延引可被成旨、達而言上候」と早風に歸して居るが、所謂早風とは李舜臣の水軍活躍の危險なりと論じて居る。

次に通信機關の不備なりし當時に於て、其の本營を名護屋に定置せしは既に大なる過失に屬し、況や其の本營を去りて、更に遠く京坂に遊居せるは更に統率の要義に背けりと論じて居る。

次に兩役共に協同動作を欠きし點をあげ、ために屢々苦戰に落入り、即ち蔚山の籠城も全くこれに歸内するものなりとなし、且その籠城につき、

（當面の大將毛利）秀元が遂に（城中に對して）一片の通知をも發することなく、將た其の行動に依つて援軍の近く指呼の間に到着せるを知らしむることなく、唯單に敵に對して之を秘することにのみ努めしものゝ如きは、吾人の一不可解事とし、且つ秀元を大いに責めんと欲する所のものなり、

と難じて居る。

次に軍兵の編制の不完全をあげ、本役に於て、良馬を畜へざる中國、西國、九州の諸兵を多く用ひ、騎馬に慣れたる關々、東北地方の兵を出征軍の編制中に加へざりし爲敵情偵察、追擊等に不便なりしことを論じて居る。なほ清正の軍の征戰中嘗て一蹉跌失敗もなく、事毎に皆な克く成功したるは其の隊の編成に比較的多くの銃手を有したるためなりと云つて居る。

又最高統帥部の編成は國内に於ける二三大戰の經驗に基き按排せられたりしものなれども、人材を適所に置くを得ず、駕馭も亦宜しきを得ざりしものの如きは、亦戰局の推移進展を阻害せし一原因に非ざるなきを得んやと論じて居る。

最後に給養の不完全をあげ、最初は鹵獲品にて足りたるも、後には其の獲得の道なく、遂に諸將連署して給養の菲薄を訴ふるに至りしは、（文祿二年三月三日）これ又道路の難と不逞の徒の蜂起並に彼の水軍の横行により、輸送の圓滑を缺きしものなりとなし、前後に於ける京城撤退の原因は糧食の缺乏にあり、其の媾和も亦これに歸因するものなりとなし、なほ後役に於て諸軍の南鮮の地を守り、敢て北進せざるはこれ全く前後に於ける給養輸送の難に鑑みたるものにして、稷山の戰後退却せしは、名を寒天に籍るも、實は其の給養問題にあるなりと論じて居る。

以上が著者の明治の大戰に參加し、親しく其の地に接し、且多年本役に關する記錄文書を渉獵して研究したる結果である。著者のかく詳細に論評せられたる點は余の研究と同一なるところの多きを喜ぶものである。然るに惜むらくは、本書を讀みて著者と同

說ならざる處亦一二なしとせず、其の一を擧ぐれば、即ち本書の卷頭に掲ぐる「傳豐太閤所持扇面」であるが、著者はこれにつき

宗義智が豐公に呈したりし朝鮮地圖其のものは、今之を見るを得ずと雖も、其の之を扇面に模寫して、以つて各諸侯に頒與せしと稱せらるゝものを見るに、模糊の閒纔に山河を認め得るのみにして、○中略朝鮮の八道を一扇面内に縮寫せしむる事は、技術の進歩したる今日に在りても、事實不可能のことなるが故に、豐公のとき、これを以て地理地形を知るの便益を得しむるの材料と爲さんとしたりしは……

と其扇面の地圖を出征諸將に頒布せし豐公を所謂猿智慧なりと笑ひ、且其の戰鬪に何等益なく、地理、地形を識るの便と爲さざるものは、地圖として價値なきものにして、一片の反古のみと論じ、又

吾人は本地圖に由つて、以て宗義調及び義智並に諸臣の戰役に對する誠意の缺如を證明するも、亦敢て誣妄ならざるを信ずる者なり。

と論ぜられて居る。さて著者の如く朝夕參謀本部出版の詳細なる地圖を手にしたる人には、かく感ぜられたるは無理ならぬことを思ふ。然し本扇面地圖は宗家の豐公に獻じたるものの寫と稱するもの、即ち「傳」づきのものである、これを以て眞實のもの同樣に解し論述せられたることは余の贊するを得ざる所である。若しこれが眞なるものとしても、宗家より呈したる地圖の大要をえがき以て本役出陣の記念位になしたるに過ぎざるもので、著者の云ふが如く實戰に之を用ひしむるため頒布したりとは如何にしても解せられざる處である。其の地圖を見るに、日本の形だもなさず、又宗家と離る可らざる關係ある釜山をもあらはさざること、並に京城、北京、南京等のみを特筆せる點より見ても、それが實戰用のものとは信じられざるのである。

この宗家と朝鮮半島との修交は數百年來のものにして、其國人の往來頻繁にして、彼の地の狀況に通ずることは記す迄もなし。しかるに如何に誠意を缺くとも、かゝる地圖の原本たる可き粗略にして反古に等しきものを豐公に呈する理なく、又豐公もこれを以て滿足すべき理なしと信ずるのである。

しかるに著者はこの地圖より原本を想ひ、其の原本は、反古に等しきものなりと斷じ、剩へ是を頒與せし豐公を笑ひ、猶是を以て宗家主從の誠意なきものゝ證とせられ、更に本役失敗の一原因とせらるることは之を遺憾とする。なほ參考迄に記して置くが、余は先年對馬にて當時のものと信ぜられ、又當時の年號を明記せる朝鮮の地圖、繪圖を數種一見せることあり、こは實に詳細なるものである。

要するに著者が本役を其の豐富なる軍事上の知識より種々批判せられ、吾等を啓發せられし處の少なからざることは感謝するところであり、又本書の德富氏の近世國民史に於ける朝鮮役と共に本役に關する良著として推奬するを辭せないのである。

二月十一日（武田勝藏）